

●大賞

「あしたこそ」

立石 采佳（神奈川県秦野市）

アボカドはうはのそらなり冬初め
日没につかまへられて花八手
短日や答はだせずあしたこそ
カタログに菓膳茶あり小夜時雨
ジャムの蓋開けられぬ朝戻り寒
半月の透けてゐたりぬ寒九かな
空つぼの干物の籠や影冴ゆる
身の丈の五ミリの詰まり冬ごもり
又三郎つちふる空を呼びもどす
レコードの無雑作にあり浅き春
眩きは黄色い唸り草青む
猫柳雲間に指のとどきけり
あしたこそ自転車のれる雪割草
春一番パラパラ漫画大慌て
流水や海を壊して迫りくる
木の芽雨心の襞をととのへり
Oと5を通過する針日永かな
つくしんぼ伸びるはずだと楽譜みる
いいたいこと言つたらいいよ桜草
花大根律儀なものよ負けませぬ

●準賞

「電気線香」

中澤 柚果（神奈川県秦野市）

柚子咲いて少し明るき寺の路

グラタンの焦げ目のかをりホピ[。]咲く

「業平食堂」むかしのメニュー冷奴

晩節を語らふ道に時計草

擦傷の膝を抱へる敗戦日

地震行きて万の流灯来世ゆく

そぞろ寒投込寺の荷風の碑

肩ぐるま笑ふ親子の良夜かな

魯田や北国街道夕日射す

刺子さす二重の糸や実南天

底冷えや電気線香すすめられ

にんげんの檻に入れられ寒旱

スカイツリー見上げるばかり冬彦忌

海見ゆる熱海の坂や冬暮光

青梅宿二階をトンと雪女

早暁の俎始潮匂ふ

冴えかへる音叉の針のゆれ止まり

七曜に分ける葉や春の星

雪解富士雲ゆく果てに父母おはす

爺さまと嫁御の筵花疲

●特別賞席

「蠢蠢百態」

矢崎 硯水（長野県諏訪市）

蝌蚪揺らぎ揺らぎG線上のアリア
わたつみの馬刀以て神は髭剃らん
てふてふの睦むまんだら蝶結び
躁鬱のおのが尾氐より蠅生まれ
眼を狙って刺す熊蜂のオスプレイ
百足虫の脚もつれてやはり地動説
ががんぼの翅の震へが死の始まり
糸とんぼそなた助詞抜き一行詩
ナポレオンの帽子に飾れ黄金虫
斜に構へれば網膜舐るなめくぢり
臥所越えスマホを越えて蚤が跳ぶ
伸びきって尺蠖天をまさぐれり
まくなぎの森抜けられぬ少年期
吾とわがザムザの目覚めへこき虫
地球の芯の蠢き募りみみず鳴く
轡虫のラップがちゃがちゃ近未来
蜻蛉の眼くるり廻ってUターン
髭打ち振り活断層を跳ぶいとど
綿虫のうしろの正面であぐれ
冬の蚊をだざいおさむの書に挟む

●特別賞次席

「夏よ恋」

白辺 いづみ（東京都青梅市）

石楠花の二万本咲き慣れた恋

伊東線誰もが窓の虹を見る

野球部は飛行機雲を打つて夏

中退を告げし目のなか卯月波

人を吸ふ非常階段雲の峰

声高き御輿担ぎの乱反射

五月晴一直線のエレベーター

屋上でペンライト振る梅雨月夜

蝉を轢きカウンセラーは生きていく

まぼろしを真殺しと書き薄暑光

思ひ切つてスカートを穿く水遊び

夕立の音透きとほる耳の奥

縁日や赤き団扇の花盛り

氷菓溶けきつてあの人いまだ来ず

揚羽蝶ベンチに堕ちて髪飾り

消防士らしきまなざし暑中見舞

なんとなくなんだか良い日冷奴

ビール飲む恋はいろいろ三十路過ぎ

ゴミ出しのビーチパラソル海を恋ふ

夏銀河それでは百億年後また

●特別賞参席

「環状線」

牟礼 鯨（東京都世田谷区）

元タカラジェンヌの径に椿落つ

真鍮の蛇口はふたつ室の花

建国の日はたまごかけご飯かな

白梅の影は朝日にほひ立つ

春風へつきだす頬の剃りたてよ

花馬酔木つがひの目白潜みゐる

ぬるぬると絡みゆくなり蝌蚪の紐

両足と両手つき出す春炬燵

大風や散りては集ふ蝌蚪の群

猫柳わたしを好きな人が好き

どの星へ出づるか知らず地虫出づ

楽団はそろひ蛇穴出づるかな

春灯やパクチー餃子店ひらく

割り箸のささくれてゐる烏曇

蜂箱の二段重ねへ春時雨

風光る山手線は加速する

亀鳴くや鳴くと言ひはる祖父の死後

蛇崩の桜や泣きしあと沁みて

角砂糖溶くる音せり花疲れ

牛乳へ肢すべらせて春の蠅

●入選十一句（応募総数287句）

蟻出づる活断層を押し分けて
（長野県 矢崎硯水）

椿落つ其角の井戸のある方へ
（東京都 牟礼鯨）

かげらろを飛び出してくるブルドッグ
（埼玉県 松本美智子）

景色ごと飲みほす春の白ワイン
（大分市 草子洗）

恋猫の角生えるまで哭き給え
（東京都 青山月子）

どこか居る鬼太郎の影日向ほこ
（小田原市 鈴木英之）

八頭呼べばすぐ来る友の在り
（伊勢原市 秋山れい）

縄文の海一望の初日かな
（伊勢原市 中尾美琳）

かんらん車ゆっくりまわる秋がきた
（伊勢原市 大里恋夢 小五）

春の雪ふしぎと胸があたたかい
（伊勢原市 田中真裕 小四）

冬の星みてたらひとつふえたんだ
（伊勢原市 二見倅成 小三）